アリスギアマガジン　読者参加型シナリオ

霞ヶ浦のサンセット

―アリス・ギア・アイギス外伝―

第二話　「知恵熱」

《みんなの好意に甘えてアクトレス中心の物語》

◆稲葉優陽の部屋

優陽は机の前に座ると、親から譲り受けたノートパソコンを起動する。

起動画面を見ながら、優陽は脚本の方向性を改めて考えていた。

優陽「……うん。やっぱりみんなの好意に甘えて、アクトレスのお話にしよっと！」

やがてパスワード入力画面となり、手慣れた動作でキーボードを操作し、文字入力ソフトを起動する。

優陽「アクトレス……強くて、可愛くて、みんなのために戦うカッコいい女の子達……」

ソフトが立ち上がるまで、アクトレスについての思いを巡らす。

優陽「どう描けば、アクトレスの魅力を出せるかな？」

頭を傾げる優陽。

パソコンの液晶画面には、既に文字入力ソフトが立ち上がっていた。

優陽「ヴァイスとのバトルは必須だよね？　……そういえば、バトルシーンってどう書けばいいんだろう？」

ノートパソコンのタッチパッドをグリグリと撫でる。

画面ではマウスカーソルがグルグルと回っていた。

優陽「バトルシーンって奥深そう。あたしに書けるかな？」

優陽は空想上のライフルを構えてみた。

ヴァイスの動きを想定して、左右に体を振ってみる。

そんな動作をしながら、どう表現すれば良いのか悩んでいた。

優陽「少年マンガとか参考になるかな？　泰介に借りてみる？」

ノートパソコンの隣に置いていたスマホを手に取る。
メッセージを澪音に送ろうとして、すぐに思い直す。

優陽「そうだ、動画みれば良いんだ！　アクトレスの動画を見ればヒントになるかも……！」

優陽は立ち上がっていた文字入力ソフトを一旦閉じて、ブラウザを立ち上げた。
ブックマークしていた動画配信サイトへ繋ぎ、アクトレスニュースの公式チャンネルを表示する。
すると黒髪がストレートに伸びた、少しつり目の女の子のサムネイルが優陽の目に飛び込んで来たので、反射的に再生した。

優陽「あ、この娘、凄くカワイイ！　それにクールでカッコいい！」

サムネイルのアクトレスは少し躊躇いがちにインタビューを受けていた。
やがて動画はバトルシーンへと移行する。

優陽「うわっ！　メッチャ強い！　剣の使い方が半端ない！」

目にも留まらぬ動きでヴァイスを倒すアクトレスに、優陽は魅了された。

優陽「凄い……あたしもこんなアクトレスになりたい……」

夢中になっていた動画は10分程度で終了し、再びサムネイルが並んだ画面が表示される。
今度は中学生らしき女の子のアクトレスが目に飛び込んできた。

優陽「うわぁ。さすが東京シャード！　あたしと同じくらいなのに、もうア

クトレスになってる！」

動画を再生すると、前へ前へと積極的に戦う姿に釘付けとなる。

優陽　「この娘、凄い！　カッコいい！　あたしも早く、こんな風に戦いたい！」

優陽はこの時点でバトルの表現を参考にするという目的を既に失っていた。

優陽　「うわっ！　あたしより年下じゃん！　凄いなぁ……」

無自覚のまま、優陽はアクトレスの動画を夢中になって漁っていた。

そして気がついた時には外が明るくなっていた。

◆教室

1限目の授業を終えるチャイムが鳴り響く。

菜澄那　「はい。それじゃあ、今日はここまで」

菜澄那は教卓に置かれていた生徒名簿と教科書を手にすると、教室のとある席に目線を移した。

そして仕方ないなぁと誰にも聞こえない声量で呟くと、クスッと笑って職員室へ戻っていった。

澪音　「優陽っ！」

優陽　「んぁ……？」

後ろの席に座っていた澪音がツンツンと優陽の背中を指で突っつくと、
変な声を上げながら優陽は目を覚ました。

調　「見事に眠ってたね」

隣の席に座っていた調は、肘を突きながら優陽を眺めていた。

優陽　「あ、うん。今日、朝までアクトレスの資料みていたから……」

目をこすりながら返事する優陽。

澪音　「へぇ、頑張ってるねぇ。張り切るのはわかるけど、初日からそんなに
気張ると持たないよ？」

優陽　「あ、うん、えへへ」

優陽　（言えない……アクトレスの動画に夢中になっていたなんてとても言え

ない……）

苦笑いを浮かべた優陽の頬を一筋の冷や汗が流れた。

調　「菜澄那ちゃんにバレてたみたいだけど、見て見ぬフリしてたね」

澪音　「優陽の努力を見てくれたのかも」

優陽　「えへへ……」

澪音　「優陽はしばらく部会に出る必要はないからね。脚本に集中するんだよ」

優陽　「ありがとう、澪音ちゃん」

自分を信じて待ってくれている二人をこれ以上裏切ることはできない。
今日こそは脚本をキッチリ書こうと誓う優陽だった。

そして次の日。

◆教室

優陽　「はぁ……はぁ……」

優陽が必死の表情で教室に駆け込んでくる。

チャイム　キーンコーンカーンコーン……

優陽　「えへへ……ギリギリセーフ！　はぁ……はぁ……」

澪音　「ホント、ギリギリだったね……って、どうしたの、その目！？」

息を切らしながら席に着く優陽。

そんな優陽の表情を見て、澪音が目を丸くした。

調　「うわー、酷いクマができてるね」

優陽　「えへへ、今日もあまり寝てなくて……」

澪音　「ちょ、ちょっと大丈夫！？　無茶してない！？」

優陽　「全然大丈夫だよー。それよりもホームルーム、始まるよ？」

丁度その時、担任の伊藤菜澄那が教室に入ってきた。

澪音　「もう。あまり無理しちゃダメだからね」

親友の忠告に対して、優陽は無言で笑った。

しかし澪音と調には、優陽の目の下にハッキリと映るクマが痛々しく思えた。

そして次の日。

◆教室

チャイム　キーンコーンカーンコーン……

ホームルームを告げるチャイムが鳴っても、優陽の姿は教室になかった。

◆稲葉優陽の部屋

扉の音　コンコン

優陽の母「優陽ー、澪音ちゃんと調ちゃんが来たわよ？」

優陽「あ、はーい！」

ベッドに横になっていた優陽が体を起こそうとした時、澪音と調が部屋

のドアを開けて中に入ってきた。

澪音「あぁ、いいよ、優陽。そのまま横になってて」

優陽「あ、うん……ゴメンね」

優陽は言葉に甘えて再び横になり、澪音と調はそれぞれがいつも使って

いるクッションに座る。

調「……無茶、しすぎたね」

優陽「えへへ、知恵熱でちゃった」

優陽が浮かべた笑みは、いつもよりほんのりと赤かった。

澪音「もう……本当に大丈夫なの？」

優陽「うん。もう全然平気だよ？　このあと続きをやろうかなって思ってた

くらいだし」

澪音　「ダメ。今日はパソコン触るの禁止！」

優陽　「えー」

澪音　「えーじゃない！」

澪音は必死に優陽を労るが、優陽はその優しさに甘えていた。
だから少しだけ自分がキツく言わないとダメだと調は考えていた。

調　「こんな状態でホン書いたって、良いホンは書けないよ？　それは優陽も分かってるよね？」

優陽　「でも……」

真剣に諭す調にもたじろがない優陽。

澪音　「でも、じゃない！」

優陽　「でもっ！」

本気で心配する澪音の叱咤にも、優陽は怯まなかった。

優陽　「あたしのワガママでアクトレスのお話、やるんだし……あたしのせいで失敗できないもん……」

そしてようやく本音を吐露した。

澪音　「優陽……」

調　「分かった。それじゃあ、今日は頭の中でまとめることだけオッケーで。台本書くのは明日以降。それでいい？」

調はみんなの妥協点を探り、冷静に意見する。

優陽　「……うん」

優陽もそれがベストな行動であると理解し、従うことにした。

澪音　「……優陽」

優陽　「なに？」

澪音　「優陽は一人じゃないんだよ？　いつでもわたしやしべに相談して」

調　「……だな」

優陽　「……うん。ありがとう、澪音ちゃん。しべちゃん」

熱で少しばかり弱っていた優陽ではあったが、澪音と調が心から頼りになる存在だと改めて感じていた。

◆帰宅路

優陽が元気を取り戻し数日経過したある日の帰り道。

優陽は歩みを止め、うつむき加減だった視線を二人に向けた。

優陽　「ねぇ、澪音ちゃん、しべちゃん。このあと、少しだけ時間くれない？」

すると澪音と調も歩みを止めて振り返った。

澪音　「うん、もちろん」

調　「霞ヶ浦でもいく？」

具体的なことを言わずとも伝わる思い。

予想以上の返答に嬉しくなった優陽は、こぼれる笑みを抑えられず二人

に飛びついた。

優陽　「うん！」

澪音と調はヤレヤレといった仕草を演じながらも、二人で優陽の体重を支えた。

◆霞ヶ浦湖畔

帰宅路から少しだけ逸れ、霞ヶ浦湖畔にある公園のベンチに座る三人。今までも何度となく通ったベンチで、指定席みたいなものだ。

澪音　「ホンのことでしょ？」

優陽　「うん。ちょっと相談したくて」

沈む夕日を見ながら、優陽は語り出した。

優陽　「みんなの気持ちは本当に嬉しいんだ。あたしがアクトレスに憧れているのを知っていて、その想いをホンにぶつけて欲しいって……あたし、幸せものだよね」

澪音と調に挟まれて座ってる優陽は、空を見上げながら微笑んでいた。だけどその微笑みにはどこか陰があることを澪音と調は気がついていた。

澪音　「……自信、ないの？」

優陽　「自信なんて最初から無かったのかな、って」

調　「それって映画の脚本のこと？　それともアクトレスのことを好きな気持ち？」

優陽　「……どっちなのかさえわからない、かも。ホンが進まなくて……それってもしかしたらアクトレスのこと、実はそんなに好きじゃないからなのかって……」

てへへと、頬を掻きながら浮かべている表情は苦笑いそのものだった。

澪音　「なるほどー。これは少し重傷だぁ」

澪音は足を放り出しながら空を見上げた。

優陽　「去年の映画のホン、澪音ちゃんが書いたでしょ？　あれ、すっごく良くできてたし、面白かった」

澪音　「褒めたって何もでないわよ？　まぁ、そう言われると嬉しいけど」

調　「ベタベタのラブストーリーだったけどね。良くも悪くも、中学生レベルを超えてたよ」

澪音　「それは喜んで良いのか分からないコメントだわ」

調　「褒めてんだけどね」

澪音　「なら、喜んどく」

ポンポンと会話が進む。

いつもの会話の調子を取り戻したところで、優陽は核心の質問を投げた。

優陽　「澪音ちゃんはホン書くとき、どんなこと考えながら書いてる？」

澪音　「うーん、どんなことって言われると答えにくいけど……」

澪音は右手を顎に触れて、その時のことを思い出しながら答えた。

澪音　「そうだなぁ……見てる人がキュンすれば良いなって」

優陽　「うん、完成した映画見て胸がキュンってなった！」

澪音　「い、今更改めて言われると、なんか照れるね……」

澪音が照れている一方で、調は冷静に優陽の話を分析していた。

調　「なるほど。つまり優陽はどんなことを考えて書けば良いのか悩んでいるってわけだね？」

調の的確な指摘に、優陽から笑顔が消える。

優陽　「……うん。アクトレスの映画って、どんなことを考えながら書けばいいのか分からなくて……」

澪音　「確かにアクトレスの映画って言われても、漠然としているよね」

調　「難しく考え過ぎなんじゃない？」

澪音　「わたしもそう思う。だけど壁にぶつかると、どう乗り越えて良いのか分からなくなるものだよね」

調　「なら、色々と整理してみようよ。アクトレスのこと。問題にぶつかったら一度分解してみるのは基本だよ」

澪音　「うん、それがいいね」

優陽　「ありがとう、澪音ちゃん、しべちゃん」

優陽は親友二人が自分のことを考えてくれるのが嬉しかった。

だけど二人に顔を向けられないのは、目が潤んでいるからだった。

澪音　「なに言ってんの。いつものことでしょ？」

ポンと軽く優陽の背中を叩く澪音。

それに続いて調もポンポンと優陽の肩を叩くと、優陽は笑顔を浮かべて頷いた。

澪音　「じゃあまずは……優陽はアクトレスのどこに憧れてるの？」

優陽　「うーん……カッコいいしー、みんなのために頑張ってるしー、みんなカ

ワイイし」

調　「まぁ、大体そんなものだよね。憧れるってことに論理的な理由なんてないわけで」

澪音　「あ、そもそもアクトレスってどうすればなれるんだっけ？　わたし、よく知らないかも……」

優陽　「えーっと、確かまずはアクトレスの事務所に入らないといけないんだと思う」

調　「その事務所に入るには、資格とかいるのかな？　試験とかあるの？」

優陽　「試験はわからないけど、オーディションとかはあるんじゃないかなぁ」

澪音　「オーディション？　どんな？」

優陽　「よくわからないけど、多分、芸能人の事務所とかと同じだよ。だから可愛い人が多いんだよ！」

調　「志保さんから何か聞いたりしてないの？」

澪音　「あぁ、確か今、土浦でアクトレスやっているんだよね」

松本志保は映像研究部のＯＧで、今は土浦の高校の寮に入っている。だから当然三人とも彼女と面識があり、優陽にとっては憧れの的だ。

優陽　「アクトレスになる方法は聞いたことないかも。今度聞いてみるよ」

澪音　「それじゃあアクトレスになる方法は置いといて。アクトレスになる人ってどんな人が多いのかな？」

優陽　「勉強もスポーツもなんでもできる人！」

調　「可愛くて勉強もできてスポーツ万能って、まるで隙がないね」

優陽　「そうだよ！　トイレにもいかないし！！」

澪音　「わー、一昔前のアイドルみたい」

乾いた声で反応する澪音。

さすがに言い過ぎたと思ったのか、優陽はテへへと笑う。

澪音　「でも確かに運動神経は良さそうなイメージはあるよね。ヴァイスと戦

うわけだし」

優陽「それに歌が上手な人も多いよ！　東京シャードじゃユニット組んで歌っている人も多いし、ダンスも上手だし！」

調「ならいっそのこと、歌って踊れる話にすれば良いんじゃない？」

優陽「……え？」

その瞬間、体中に電気が走ったような感覚を優陽は味わった。

優陽「それだよ、しべちゃん！」

調「どれだよ、優陽ちゃん」

優陽「歌だよ、歌っ！　『歌』をテーマにすればいいんだ！」

目をキラキラと輝かせ、右手の拳を握りしめながら優陽は自信満々に話す。

その様子に二人はやや圧され気味だ。

澪音「歌をテーマって、ミュージカルにでもするつもり？」

優陽「違う違う！　歌を鍵（キー）にすればいいんだよ！　例えばヴァイスとの最終決戦で、歌に励まされて戦うとか！」

自信満々に語る優陽とは対照的に、澪音と調は冷静に分析を始めた。

調「……なるほど。少しベタではあるけど、悪くはないね」

澪音「そうだなぁ。確かにうまくはまれば面白くなるかも」

調「それに歌がテーマになるなら、私の腕の見せ所だしね」

調は子供の頃からピアノを習っていた。

そのため調が映研に入ってからは、音関係を調が一手に引き受けていた。

優陽「うん！　しべちゃんに歌を作ってもらいたい！」

調　「とびっきりの良い曲を作るよ。だから、良い詞を書くんだよ、優陽」

優陽　「へ……？　あ、あたし！？」

優陽はパチクリと瞬きした。

そして『歌』は曲だけで無く、歌詞を創る必要があるものだと、この時になってハッキリと認識するのだった。

◆稲葉優陽の部屋

優陽　「歌をテーマにする……それは良いとして」

ノートPCと向かい合う優陽。

優陽　「歌を聴いたヴァィスが、驚いて怯んでしまうとか……？」

その姿は昨日までの優陽と違い、自信に満ちあふれていた。

優陽　「歌を聴いて怯む……？　どうして……？　何か理由があったりする？」

色々なアイディアが浮かんでは、それを深めていく。

優陽　「例えば、その歌が懐かしい、とか……？」

一つのアイディアは、やがて話の骨格となっていく。

優陽　「うん、それ、良いかも。ヴァイスが茨城シャードまで侵入してきて、ピンチに陥る……だけど街中で流れていた歌に怯んで逃げてしまう……」

骨格を整えるために展開が広がっていき、伏線へと昇華されていく。

優陽　「なんで逃げたのか？　人類の『歌』に驚いたんだ。それはどこか懐かしくて、戦意を失ってしまう」

伏線がうまく嵌まっていくと、物語は綺麗に流れ始める。

優陽　「そこでヴァイスはメチャクチャな大群で攻めてくるけど、最後は『歌』で人類は救われる……うん、大まかなストーリーはこんな感じでいいかな！」

高揚感をおぼえる優陽。

スポーツ選手がゾーンに入るように、スラスラとアイディアが浮かんできた。

優陽　「これならみんな、納得してくれるよね！！」

一気に筆が乗った優陽は、外が薄らと明るくなるまでノートパソコンのキーボードを叩いていた。

◆映画研究部部室

完成した脚本をみんなで読みあう。

優陽はドキドキしながら審判の時を待っていた。

調　「勇気がなくて、歌手になる夢を躊躇っている女の子、か」

澪音　「その娘が最後に歌を歌うんだね？」

優陽　「うん！　アクトレスの女の子に励まされて、最終決戦のために歌うって話」

調　「ダブル主人公ってわけか。アクトレスの女の子と歌手を目指す女の子。

この二人が出会う場面から始まるわけね」

澪音　「悪くない……ううん、むしろ結構面白そう」

泰介　「そうかぁ？　なんか古いアニメでこんな話を見たことあるぜ？」

奥井　「あぁ、ボクも知ってるよ。変形する戦闘ロボットのアニメだよね？　あのミサイル発射のシーン、全てが手描きって信じられないよね」

泰介　「スゲェ、カッケーっすよね！　まるでサーカスっよ、サーカスっ！！」

奥井　「まぁ、確かにあのアニメの展開に似ているかもしれないけど、どんなお話でも何らかの似たような要素は入ってしまうよね。だけどそれを踏まえても、このシナリオは面白そうな話だと思うけどな」

泰介　「で、ですよね！　オレもそう思います！」

斜に構えていた反抗期真っ只中の泰介だが、尊敬する先輩には逆らえない。

澪音は泰介に向かって「バーカ」と無声の口撃を加える。

それに気がついた泰介は「ウッセ」と口を動かし、反応した。

優陽　「みちるちゃんは？」

みちる　「わ、私も面白そうだと思います……」

澪音　「遠慮することはないんだよ、みちる」

みちる　「ううん、本当に面白いなって……こんなお話書けるって凄いなって思って……」

そう話すみちるの表情は、決して怯えたものではなく素直に笑っていた。

優陽　「良かった～　みちるちゃんが気に入ってくれて～！」

優陽にとっては、誰よりもみちるに脚本を気に入ってもらいたいと思っていた。

なぜなら……

優陽　「実はね、この歌手を目指す女の子の役をみちるちゃんにやってもらいたいって思っているんだ」

みちる　「えっ！？　わ、私っ！？　ちょ、ちょっとまって、優陽ちゃん！！」

中学に入ってからケジメをつけて優陽先輩と呼んでいたことを忘れるくらい動揺するみちる。

みちる　「わ、私、こんな重要な役なんてできないよ！　演技なんかしたことないし！？」

澪音　「……いや、みちるにピッタリだよ。むしろ今のみちるしかできないかも」

優陽　「でしょ？」

みちる　「え……えっ！？」

夢に向かって進むことを躊躇い、おどおどしている女の子。
そんな役柄と今のみちるは重なり合うと、三年生組はみんな感じていた。

澪音　「もちろん、もう一人の主役になるアクトレスは優陽だよね？」
優陽　「えっ！？　あ、あたし！？」
調　「他に誰がいるの？」
優陽　「え……えっ！？」

戸惑う優陽の姿は、みちると同じだった。
それを見て澪音は、この二人は良いコンビになると確信していた。

澪音　「それじゃあ、改めて確認するけど、みんなはこの脚本でいい？」
奥井　「ボクは異議なし」
泰介　「じゃあ、オレも」
調　「問題無い」
みちる　「……」
澪音　「みちるは？　とりあえず役をやるやらないは置いといて」
みちる　「……私も良い……と……思います」

この時点でみちるは役を降りるのは許されないと感じていた。
まだ完全に納得したわけじゃないけど、自分のワガママで映画を潰せないと感じていた。
それを含めての『良い』という言葉であると、澪音は理解していた。

澪音　「じゃあ、決まりね。それじゃあ、僭越ながらわたしがメガホンとるわ。音周りはしべ。美術関係は奥井君と泰介。他の役は持ち回りで。それで良いわね？」

部室内が拍手の音で満たされる。

澪音　「というわけです、伊藤先生」

澪音は端で聞いていた顧問の伊藤菜澄那の方を向いた。

菜澄那　「はい。とても良い作品になりそうね。私も楽しみだわ」

その言葉を持って、作品が動き出した。

◆草野澪音の部屋

澪音　「うーん……どうしよう。どっちのシーンから撮った方が良いのかな？」

優陽が書いた脚本を読みながら、澪音は頭を抱えていた。

澪音　「優陽が一生懸命に書いたホンだもん。絶対良い映画にしないと……」

澪音は何度も何度も脚本を読み直した。

そこから二つの演出プランを導き出した。

澪音　「普通に考えれば、二人の主人公が出会うシーンから撮った方がいいわよね？」

アクトレスの女の子と歌手を夢見る女の子。

物語は二人の出会いから始まっていた。

澪音　「だけどゴールを明確にしてみんなに共通のコンセプトを描かせるのも一つの手だよね？　そう考えるとラストシーンからというのも一つの手かも……」

アクトレスの女の子が危険を冒してヴァイスの巣へ突入する前日。

二人の少女達が互いの夢を重ね合い、指切りしてそれぞれの夢へと向かうシーン。

【選択】

演出を担当する澪音が選んだ、最初の撮影シーンは？

《A　アクトレスの優陽と民間人のみちるの出会いのシーン》

《B　優陽がラスボスに特攻するラストの重要シーン》